

一〇二二年度 一般三月入学試験

国 語

〔注意事項〕

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子は31ページ、解答用紙はマーク・シート1枚です。監督者の指示に従って確認しなさい。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
4. マークは、マーク・シートに記載してある「記入上の注意」をよく読んだうえで、正しくマークしなさい。
5. 受験番号及び氏名は、マーク・シートの所定欄に正確に記入し、また受験番号欄の番号を正しくマークしなさい。
6. 監督者の指示があつてから、マーク・シートの左上部にある「科目欄」に受験する科目名を記入しなさい。
7. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

国

語

(60分 100点) (解答番号

1

49)

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

二十数年前、当時小学校の三年生だった私は、大阪中之島の西端にあたる船津橋に住んでいた。家はちょうど土佐堀川の川筋にあり、裏窓の下は直接深い川になっていた。私には同じクラスの、カツノリくんという友だちがいて、家も近くだったから、よくお互い行き来して遊んだ。ある夏の正午近く、カツノリくんは私の家にやって来て、お祖父^{じい}さんに買ってもらった模型の船を一緒に組み立てようと誘った。カツノリくんには両親がなかった。死に別れたのか、それとも、もっと他の事情からなのか、私たちは誰もその理由を知らなかった。お祖父さんが、カツノリくんを自分の子として育てていた。

私たちは物置に使われている畳敷きの部屋に入り、錐^{きり}や針金やナイフなどを道具箱から捜し出し、船の組み立てにかかった。カツノリくんのお祖父さんは、開業医であった。私の家から歩いて二、三分のところ、内科の病院を営^いんでいた。⁽¹⁾ユウ福な家のいわば一人息子だったから、欲しいものは何でも買ってもらえるらしく、⁽²⁾私などがどう両親にねだっても手に入りそうにない高価なおもちゃを、次から次へと持ち出してきて、私をうらやましがるのだった。

私たちの遊んでいた物置は川に面していた。板壁の一角に観音開きの扉があった。何のための扉だったのか忘れてしまったが、下はすぐ川なので、危険防止のため、針金で把手^{とって}をくくりつけてあった。ところが、その日に限って針金を外されていたのである。あとになって、父が空気を入れ換えるためにあけはなち、そのまま針金をくくり忘れたことがわかった。ところが、私たちはそんなこととは知らなかったのである。

カツノリくんはいつもと同じように、観音開きの扉に背をもたせかけ、そのまま、(3)川に落ちたのだった。ふいに扉のむこうに消えてしまったカツノリくんを捜して、私は川を覗^{のぞ}き込んだ。カツノリくんは、あおむけになって土佐堀川の水面に浮

いていた。人形のように、身動きひとつせず、ぷかぷかと浮いているのだった。そして、そのまま私の顔を見ていた。私は大声で母を呼び、ついで河畔を見やった。⁽⁴⁾ あいにく、ポンポン船は通っていないかったが、赤フンドシひとつで小舟をあやつっている見知らぬ男の姿があった。

「おつちゃん、助けてエ。あの子が川に落ちたア」

私は悲痛な声をあげて、真下の川面を指差した。その声で、男は怪訝な面持ちで指差す地点を窺い、やつとそこに浮かんでいる子供の姿を認めた。彼は慌てて舟の向きを変え、巧みに櫓を漕ぎながら、カツノリくん近づいて行つた。走り込んで来た母は、窓から顔を突き出し、蒼白になつてカツノリくんを見ていた。そして、叫んだ。

「動いたらあかんでエ。そのまま、じつとしてるんやでエ」

小舟がカツノリくんの傍に近づくまでの時間は、随分長く感じられた。だが不思議なことに、彼は沈まなかつた。カツノリくんの浮かんでいる地点だけが、まるで水ではないように思われた。⁽⁷⁾ 川の水が目に入るのか、ときおり顔を左右に振つたが、体だけは棒のようにして動かさなかつた。

やつとたどりついた赤フンドシの男は、片手でカツノリくんの腕をつかみ、小舟に引き上げた。カツノリくんはうつすら目をあけていたが、ほとんど意識はなく、私たちの呼びかける声にも反応を示さなかつた。水もまったく飲んでいなかつたし、息も脈もしつかりしていたが、青ざめた死人のような顔には、いつまでも血の色が返つてこなかつた。

しらせを受けて、お祖父さんが駆けつけて来た。大きなタオルにくるんで、とにかく自分の病院につれ帰り、応急処子を施した。カツノリくんが正気を取り戻したのは、夕刻であつた。彼は川に落ちたとき、驚愕と恐怖で、一種の失神状態におちいつたのである。それが、彼には幸いしたのだった。もし、少しでも、あばれたりもがいたりしていたら、カツノリくんはたちまち川に沈んでしまつたに違ひなかつた。死んだようになってしまつたことで、彼は自分の命を救つたのだった。

あきらかに、事故は我が家の過失だつた。⁽⁹⁾ 父と母は何度もカツノリくんのお祖父さんに詫びた。しかし、それきりカツノリくんは、私の家に遊びに来なかつた。学校で逢つても、気まずそうな素振りを見せて、口をきかなかつた。だから私たちは、その

まま疎遠になり、中学校も高校も同じ学校に進みながら、決して交わらぬ間ガラのまま、時をすごしたのだった。⁽¹⁰⁾

カツノリくんが、疾走している列車から落ちて死んだのは、それから十数年たった昭和四十年のことであった。当時、彼は医科大学の三回生で、山岳部に属していたらしいから、私はカツノリくんの死を知って、⁽¹¹⁾てつきり山でソウ難したものと思つたが、彼は山岳部の仲間と冬の穂高へ向かう中央本線の列車から転落したのであつた。どこでどうやって転落したのか、同行していた仲間の誰もが気づかなかつたということだつた。なぜそんな事故が起こつたのか、原因は結局あいまいなままになつたが、そのカツノリくんの葬儀に、私は二、三人の友人とつれだつて参列した。まだ現役の医者として、⁽¹³⁾かくしゃくと患者の診察にあたつていたお祖父さんは、その日も決して取り乱すことなく無表情に坐つていた。私たちは⁽¹⁴⁾ショウ香をすまずと、⁽¹⁵⁾そそくさとその場を辞した。

それから何日かたった土曜日、私は風邪をひいて熱を出した。いつもは玉川町にある病院に行くのだが、そこは午後からは休診だつた。カツノリくんのお祖父さんが、昔から土曜日の午後も診察していたことを思い出し、私は何となく気のひけるものを感じながら、病院の玄関をくぐつた。

土曜日の午後も診察してくれるのは、近辺ではそこだけだつたので、思ひのほか患者も多く、私は長いあいだ、順番を待たなければならなかつた。以前は確か看護婦がいたはずだつたが、姿は見えなかつた。患者の名前を呼ぶ、聞きおぼえのあるお祖父さんの声が、⁽¹⁶⁾した待合室に響いてきた。

お祖父さんは、私の顔を見ると、

「このあいだは、忙しいところを、わざわざ来てもらて、ありがとうございます」

そう言つて丁寧に腰を折つた。

「いえ、ほんまに何て言つたらいいのか……」

感冒だから、暖かくしてゆつくり休むようにと、お祖父さんは言った。私のあとには、もう待つている患者はいなかつた。

「きょうは、これで終わりや」

本日休診の札を玄関のところ吊つてから、お祖父さんは、服を着ている私のところに戻つて来た。

「いつまでもお元気そうですね」

「いや、もう歳や。患者の多い日は、疲れがひどいんや」

そして、来月からは午前中だけ診察するつもりだとつけたした。診察室の中は、昔と少しも変わっていない。木製の茶色いカルテ入れも、診察台の位置も、壁に掛けてあるレンブラントの絵も、そっくりそのままであった。

「お幾つになられましたか」

「うん……もう七十八になつてね」

カツノリさんと良く似た細長い目が笑っていた。

「生前は、いろいろお世話になつたな」

「いえ、小学生のころは、ほんまに毎日一緒に遊んでましたけど……」

それで、私はあの事件以来、二人の間ガラが疎遠になつてしまったことを話した。

「ああ、確かにそんなことがあつたな」

お祖父さんは瞳をどこか遠くに向けて、じつと思ひ起こしていた。

「そうや、あんたの家で遊んで、川に落ちたんやつたな」

「なんで、あのとき沈んでしまえへんかつたんか、ときどき思い出して、(17) することがあるんです。うまい具合に、近くに小舟に乗つてる人がいて

「赤フンドシの」

「ええ、そうです」

「あの人は、いまは渡辺橋の近くで保険の代理店をやつてはすや。あのころは、中央市場で働いとつたんや。……(18) 死にぞこないは長生きするいう話やけど、あいつはそうやなかつたな」

そうやって白い診察着を脱ぐと、ゆっくり膝ひざの上でたたんだ。それから誰に言うともなくつぶやいた。

「父親の味も、母親の味も知らんと、可哀かわいそうやった。あるとき死んでもよかったなア」

¹⁹⁾ 私は黙っていた。どんな言葉も浮かんでこなかった。あるとき、土佐堀川にぶかぶか浮いて、奇蹟きせきてき的に命びろいしたカツノリ

くんの、そこから中央本線の列車に乗り込む十数年は、いったい彼にとって何だったのだろうか、私はぼんやり考えていた。

お祖父さんは、月が変わるとすぐ病院を閉めてしまった。出身地である山口県に帰ったという噂うわさを耳にしたが、本当かどうか私にはわからずじまいである。

(宮本輝「寝台車」による)

(注) ポンポン船——エンジンがポンポンと独特の音を発する小型の舟

問 1 傍線番号(1)・(8)・(10)・(12)・(14)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

1

5

(1) ユウ福

- ① ユウ雅に暮らす
- ② 彼はユウ国の士だ
- ③ ユウ然とかまえる
- ④ 余ユウをもった行動
- ⑤ 彼女はユウ弁家だ

(8) 処チ

- ① あてはまる数チを入力する
- ② 根気強くチ療する
- ③ 安全装チが機能する
- ④ 日常の愚チをこぼす
- ⑤ チ死量の毒薬

(10) 間ガラ

- ① ヘイ役を拒否する
- ② 横ヘイな態度に憤る
- ③ 貨ヘイ経済のシステム
- ④ 託児所をヘイ設する
- ⑤ 悪ヘイを改める

(12) ソウ難

- ① ソウ方の言い分を聞く
- ② 焦ソウにかられる
- ③ ソウ丁の美しい本
- ④ 地ソウを調べる
- ⑤ 交通事故現場にソウ遇する

(14) ショウ香

- ① 無ショウで修理を行う
- ② 運営に支ショウをきたす
- ③ 火事で家屋がショウ失する
- ④ ショウ任試験を受ける
- ⑤ オリンピックのショウ致

5

3

1

4

2

問2 傍線番号(2)「らしく」(7)「ように」と用法が同じものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

6

7

(2) 「らしく」

- ① ようやく社会人らしいふるまいを身につけた
- ② 今日はいかにも春らしい暖かな陽気だ
- ③ わざとらしい笑みを浮かべてみせる
- ④ 子どもながら、もつともらしいことを言う
- ⑤ 今度の対戦相手は相当強いらしい

(7) 「ように」

7

- ① にご虫をかみつぶしたように不機嫌だ
- ② 電車で遅れないように早めに家を出た
- ③ 自分に都合のいいようにごまかす
- ④ やつと自転車に乗れるようになった
- ⑤ 今後ともご鞭撻べんたつくださいますように

問3 空欄番号 (3) (16) (17) に入る語として、最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ

選びマークしなさい。ただし重複は避けること。

8 (3)

9 (16)

10 (17)

- ① ぞつと
- ② ぶいつと
- ③ すとんと
- ④ ぼんやりと
- ⑤ がらんと

問 4 傍線番号(4)・(5)・(11)・(13)・(15)の本文中における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

11

15

(4) あいにく

11

- ① ちょうど
- ② たまたま
- ③ 意外にも
- ④ 折悪あしく
- ⑤ もちろん

(5) 怪訝あやまな

12

- ① 気難しあやまそうな
- ② 厄介あやまそうな
- ③ 疑わしあやまそうな
- ④ 心配あやまそうな
- ⑤ 驚いたあやまそうな

(11) てつきり

13

- ① おそらく
- ② 何となく
- ③ うろたえて
- ④ 奇妙なことに
- ⑤ 間違いなく

(13) かくしゃくと

14

- ① 老骨にむちを打って
- ② 年を取っても元気そうに
- ③ 頑固で気難しい様子で
- ④ 人のよさそうな態度で
- ⑤ 少し体が弱っていても

(15) そそくさと

15

- ① いたたまれない様子で
- ② 後ろ髪を引かれる様子で
- ③ 落ち着かない様子で
- ④ 気分の沈んだ様子で
- ⑤ 気まずそうな様子で

問5 傍線番号(6)「時間は、随分長く感じられた」の理由として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしな

さい。

16

- ① 川の流れはあまり速くなかったのに、カツノリくんの救助に向かう小舟の動きがひどく緩慢だったから
- ② カツノリくんが川に落ちてしまったのは自分のせいだという自責の念が、強く自分をさいなんでいたから
- ③ カツノリくんが母の忠告を聞き入れてじっと動かなかったので、まるで時間が止まったように思えたから
- ④ 川に落ちたカツノリくんを小舟に乗った男が助けに行くのを、自分たちはただ見守るしかなかったから
- ⑤ カツノリくんを救助しようとして小舟がどんなに急いでも、ポンポン船のように速く進まなかったから

問6 傍線番号(9)「学校で逢っても、気まずそうな素振りを見せて、口をきかなかつた」とあるが、これはカツノリくんのどのような様子をいつているのか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

17

- ① 川に落ちて失神したところが、「私」に見られたことが、恥ずかしくてたまらない様子
- ② 川に落ちる原因を作った「私」の家と祖父の間の事情で、今までどおりにはつきあえず、困惑している様子
- ③ 川に落ちた自分を、すぐに飛び込んで助けてくれなかった「私」に対して落胆を隠せない様子
- ④ 「私」の家族の不注意から川に落ちたことを逆恨みして、「私」のことを許せない様子
- ⑤ 川に落ちた恐怖がどうしても忘れられず、「私」とは口をきくのも恐ろしいと思っている様子

問7 傍線番号(18)「死にぞこないは長生きするいう話やけど、あいつはそうやなかつたなア」とあるが、このときのお祖父さんの心情の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

18

- ① 身寄りのない老人を独り残して列車から転落死してしまったカツノリくんの軽率さを恨めしく思う気持ち
- ② カツノリくんの死にショックを受け、死にぞこないは長生きするという話は全くでたらめだと強く憤る気持ち
- ③ 少年期に一度、九死に一生を得たにも関わらず、結局は夭折してしまったカツノリくんの短い人生を深く悲しむ気持ち
- ④ 父親の味も母親の味も知らないカツノリくんに幸せな人生を送らせてやれなかつた自分を責める気持ち
- ⑤ 二度も転落事故を起こしたカツノリくんの軽はずみな行動を、どうしても非難せずにはいられない気持ち

問 8 傍線番号(19)「私は黙っていた」の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

19

- ① 「父親の味も、母親の味も知らんと、可哀そうやった」というお祖父さんの言葉に賛同すると同時に、カツノリくんとなぜもつと親しくしなかつたのかと悔やんでいる
- ② 「父親の味も、母親の味も知らんと、可哀そうやった」というお祖父さんの言葉から、カツノリくんの家庭の事情はどのようなものだったのかと思いをめぐらせている
- ③ 「あるとき死んでもよかつたなア」というお祖父さんの言葉の真意がわからず、賛同すべきなのか反対すべきなのか迷って、何も言えないでいる
- ④ 「あるとき死んでもよかつたなア」というお祖父さんの非情な言葉に憤りを感じながらも、身寄りのなくなつたお祖父さんの境遇に同情して無言でいる
- ⑤ 「あるとき死んでもよかつたなア」というお祖父さんの言葉に、どう応^{こた}えていいのかわからないまま、自分もカツノリくんの短い人生に思いをはせている

問9 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

20

- ① 「私」の家の物置で遊んでいたカツノリくんはふいに川に落ちてしまったが、一種の失神状態であおむけに浮かんでいたので命拾いをした
- ② 川に落ちたカツノリくんは、「私」の必死の叫びにこたえた小舟に引き上げられ、医者であるお祖父さんがかけた時にはすぐ正気を取り戻した
- ③ お祖父さんの病院は歩いて二、三分のすぐ近くだったにもかかわらず、「私」はカツノリくと疎遠になったことを口実に、いつも玉川町にある病院へ行っていた
- ④ 「私」が友人と連れ立ってカツノリくんの葬儀に参列したとき、お祖父さんは決して取り乱すことなく、孫の死を悲しんではいなかった
- ⑤ カツノリくんが川に転落して命拾いしながらも結局は若死にする運命であったことを、カツノリくんのお祖父さんが「私」にしみじみと説いて聞かせた

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

羅列という方法は、けっして清少納言の独創によるものではない。

たとえばヨーロッパ文学の歴史を溯⁽¹⁾れば、ホメロスやテオクリトス、ウエルギリウスの往古から、詩人たちは理想的な風景を描写するさいに「混樹の森」*oravura interludes* というトポス⁽²⁾に訴⁽¹⁾えたものであつた。これは数十種類におよぶ樹木を次々と列挙してゆくことで、その場の光景の美しさを賛美するという手法であるが、あるとき修辞として採用されて以来、現実に可能な植物の組み合わせ、共存を離れて、自在な言語の結合としてマニエリスムの発展⁽⁴⁾を示すことになつた。もつともそこにはあらかじめ世界全体に見えない秩序が横たわつていて、樹木はどこまでも力算⁽⁵⁾されるものの、ある閉⁽⁶⁾じられた、静止した宇宙へと統合されていくばかりである。ルネッサンス期に至つてラブレ⁽³⁾ーが出現したのち、この静観的な手法のなかに騒々しい不協和音が乱入するわけだが、それは別の話として、『枕草子』が執筆された十一世紀初頭までのヨーロッパ文学におけるリストの手法⁽⁴⁾は、どこまでも見えないが偏在する秩序のもとに、統合を前提としてなされるものにすぎず、けっしてもの自体、事項自体が織りあげる繊細な審美学と批評性を獲得することがなかつた。

ちなみに、ウエイリーは、若干の留保はしながらも、『枕草子』のリストに影響を与えたかもしれぬ書物として、李商隱⁽⁷⁾の『義山雜纂』の名をカカ⁽⁸⁾げ、そのいくつかの断片を比較紹介している。この唐代のデカダン詩人⁽⁹⁾は、似つかわしくないもの、悪印象を与えるもの、近寄ろうとしないもの、といったリストを後世に残したが、それはシ井の人々が共有する一般的価値観や判断基準をかならずしも越えるものではなかつた。一方、清少納言はもっぱら宮廷での生活体験に基づいて、自分の好みと微妙な感受性からリストを作りあげた。こうした違いはあるものの、両者のあいだにある嗜好⁽¹⁰⁾と関心を基準として、世界に存在するあまたの事物のなから選択と羅列⁽¹¹⁾を行い、それをある審美学のもとに提示してゆくという態度には、共通するものがある。あるいは、ここから発展して、蒐集⁽¹¹⁾と羅列をめぐる比較文化論が可能となるかもしれない。

清少納言によるリストは、『枕草子 表現の論理』(有精堂、一九九五)を著した三田村雅子によれば、二種類に大別できると

いう。「……は」というタイプのものと、「……もの」タイプのものである。三田村の言葉を引用するならば、「……は」章段が中宮サロンの常識なり共通観念を尾骶骨の痕跡こせきこたのように引きずって、個性的なものの見方を逸脱としてしか所有できなかったとすれば『……もの』章段はその逸脱そのもの、常識や既成知識からはみだし方そのものを問題の座に据えようとする章段であった。もう少しわかりやすく直してみると、前者は当時の宮廷、中宮の小さなサロンを支配していた世界観の内側において作りあげられた、充分にイデオロギー的な言説であり、個人の嗜好は抑圧の痕跡を留めてとどいる。一方、後者はイデオロギーからの逸脱、脱落を主眼としており、ここではステレオタイプの嗜好に対する小気味いい批評がなされることになる。¹⁴

いうまでもないことだが、『枕草子』におけるこうしたリストは、先行するテクストと密接な関係にあり、そこからの豊富な引用、言及、パロディに満ちている。研究者たちは先に名をあげた『義山雜纂』のみならず、『十列歴』『古今和歌六帖』といった書物が、清少納言に大きな示唆を与えたことをつとに論じているし、『枕草子』に挙げられた地名の夥しいカタログを、平安時代の選ばれた、数少ない読者と同じ次元において、細部にわたってシヨウ味するために、前もって『古今集』に代表される和歌の言語宇宙に精通しておく必要があるだろう。そして、それはわれわれの時代には、一部の専門的研究者を別とすれば不可能であり、たとえ実現されたとしても、それを通して作者が執筆時に抱いていたウィット（注6）イイな感情が再現されるという保証はどこにもない。にもかかわらず、『枕草子』という書物は、読む者に大きな知的悦びよろこを与える。人に侮られるもののリスト。ノスタルジアをそそのめるもののリスト。先の遠いもののリスト。絵に描くと見劣りのするもののリスト。見るとたいしたことはないが、漢字で書く18と仰々しいもののリスト……。フーコーの『言葉と物』の冒頭ではないが、こうしたあまたのカテゴリーを根拠づけているものは何なのだろうかという問いが、おのずから生じてくる。いったいいかなる平面のうえで、かくも雑多な事物が対等の資格で出会い、親しげに並びあっているのだろうか。ここにはヨーロッパ文学のそれとはまったく異なった、事物の認識の秩序が働いている。そして現在の映像作家たちが、そこに新しい審美学の可能性を見て取ったことは、ある意味で当然かもしれない。

ころは、正月、三月、四月、五月、七、八、九月、十一、十二月、すべて、をりにつけつつ、一年ながら、をかし。

『枕草子』第二段に置かれた文章である。ここではリストを作ろうと思ひ立ち、指を折り出した手が、あれやこれやと好みの月を数えあげているうちに、いつしか一年のほとんどの月を列挙してしまつて自分の気がついて、いささか決まり悪そうにしているようなさまが、なんともおかしい。いうまでもないが、ここに作者の周到な修辞を読み取ることは、けつして困難ではない。たとえば、このリストからはなぜか二月と六月、十月だけが排除されている。旧暦であることを計算に入れて、それを早春、夏、秋の半ばと解してみれば、清少納言が当時の一般の通念⁽²¹⁾に逆らつてこうした季節をあえて外してみせたことの、批評的な意味をまず問うべきかもしれない。

だが、それにもまして興味深く感じられるのは、以下に全編を通して延々と叙述されることになるリスト、カタログの、まさしく冒頭において、数えあげることの無意味さが提示されているかのようには、書物が編纂^{へんさん}されていることだ。これは意図的な配慮である。「すべて、をりにつけつつ、一年ながら、をかし」。心の赴くままに指を折つて数え出してみると、いつの間にか月という月のあらかたを選び出してしまった。であるならば、事物を選択し、ひとたび選択したものを羅列するという行為に、いったい何の意味があるのか。清少納言が書物の始まりにさりげなく置いたこの一節はわれわれに、指を折つてものを数えあげる身振りの美しさとドウ心⁽²²⁾のみならず、それをじつと眺めて苦笑している作者の目の存在を意識させる。知性の媚態^{びたい}とは、これを指して**い**うべき言葉であろう。

(四方田犬彦『心ときめかす』による)

(注1) トポス——場所、場

(注2) マニエリズム——ルネッサンスからバロックに移行する時期の誇張の多い技巧の様式

(注3) ラブレール——フランスのルネッサンスを代表する作家、一四九四年頃^{ごろ}—一五五三年頃

(注4) リスト——目録、一覧表

(注5) デカダン——退廢的な、芸術至上的などといった意味の十九世紀フランスの芸術の傾向

(注6) ウィットーイ——機知のある、氣の利いた

問1 傍線番号(1)「溯れ」と同じ活用の動詞は、傍線番号(2)「訴え」・(3)「列挙し」・(4)「示す」・(6)「閉じ」・(7)「見え」のうち
 どれか。次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

21

- ① (2)訴え
- ② (3)列挙し
- ③ (4)示す
- ④ (6)閉じ
- ⑤ (7)見え

問2 傍線番号(5)・(8)・(10)・(16)・(22)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

22

26

(5) カ算

22

- ① 原材料をカ工する
- ② 遠慮カ借ない態度
- ③ 負カを掛ける
- ④ カ敢に攻撃する
- ⑤ カ条書きにする

(8) カカげ

23

- ① 進路を決めるケイ機となる
- ② 互ケイ的な条約を締結する
- ③ 防犯意識をケイ発する運動
- ④ 決定事項をケイ示する
- ⑤ 大学生なら必ケイの良書だ

(10)

シ井

24

- ① 幼児のかわいいシ草
- ② 結婚式のシ会を務める
- ③ 株式シ場の動向をみる
- ④ 強敵に一シ報いる
- ⑤ シ葉末節にこだわる

(16)

シヨウ味

25

- ① 裁判所からシヨウ喚される
- ② 戸籍シヨウ本を取り寄せる
- ③ 時期シヨウ早と判断される
- ④ 事件のシヨウ細を報道する
- ⑤ シヨウ状授与式に参列する

(22)

ドウ心

26

- ① 幼稚園からドウ謡が聴こえる
- ② 暗いドウ穴の内部を調査する
- ③ 救命ドウ衣の位置を確認する
- ④ 分ドウで薬品の重さを量る
- ⑤ 半ドウ体工場が集中する地域

問3 傍線番号(9)・(13)・(14)・(15)・(18)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

27

31

(9) 似つかわしくない

27

- ① 快くない
- ② 同じではない
- ③ 似ていない
- ④ まねていない
- ⑤ しっくりしない

(13) 主眼として

28

- ① 主な理由として
- ② 第一の目的として
- ③ 主要なきっかけとして
- ④ 明確な視点として
- ⑤ 確固としたこだわりとして

(14) 小気味いい

29

- ① 才能のある
- ② はっきりした
- ③ 気持ちのいい
- ④ 欠点のない
- ⑤ 筋の通った

(15) つとに

30

- ① 早くから
- ② じっくりと
- ③ たびたび
- ④ 学問的に
- ⑤ 理論的に

(18) 仰々しい

31

- ① 複雑な
- ② ややこしい
- ③ 難しい
- ④ もっともな
- ⑤ 大げさな

問 4 傍線番号①「菟集と羅列をめぐる比較文化論」の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

32

- ① 李商隱と清少納言がどのような視点で物を集め、整理していったかを比較・検討することを通して、中国と日本の文化・発想形式の異同を研究していく学問
- ② デカダンな中国の詩人の詩と平安朝を代表する清少納言の作品とを対比させながら、そこに大陸文化と島国日本との深い文化的関わりを見出していこうという学問
- ③ 一般的価値観や判断基準を重視した李商隱の思考法と、清少納言に代表される平安王朝の思考法とを比べながら、そこに菟集と羅列のあり方の相違点を見出していく学問
- ④ 中国と日本にある十一世紀初頭までの多くの事物を列举した代表的な書物を比較することによって、両者の精神的な土壌を究明し、相互理解を深めていこうという学問
- ⑤ 『義山雜纂』からわかる当時の中国の一般的な価値観と、『枕草子』に見える一般的な価値観を比較検討し、大陸間の文化伝播の様態を明らかにしていこうという学問

問5 傍線番号(12)「中宮サロンの常識なり共通観念を尾骶骨の痕跡のように引きずって」の説明として、最も適切なものを、次

の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

33

- ① 清少納言が、『枕草子』において、宮廷生活における生活体験を精緻せいじに記述することを心がけた様子
- ② 宮廷生活における清少納言の立場が、特段変わったものとは言えず、身分相応のものであった様子
- ③ 清少納言が、『枕草子』に、漢詩文や日本の古典の表現を当時の貴族の常識として引用している様子
- ④ 清少納言が、『枕草子』における記述に、常識や共通観念から外れた内容を盛り込もうとした様子
- ⑤ 『枕草子』に見える清少納言の考え方の一部が、当時の宮廷で支配的だった思考の枠内であった様子

問6 傍線番号(17)「精通」、(21)「通念」とあるが、それぞれの「通」と同じ意味で漢字が用いられている熟語の組み合わせを、次

の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

34

- | | | | | | |
|---|----|---|----|------|------|
| ① | 通曉 | ・ | 通過 | (17) | (21) |
| ② | 通行 | ・ | 通貨 | | |
| ③ | 食通 | ・ | 通説 | | |
| ④ | 通読 | ・ | 通勤 | | |
| ⑤ | 通知 | ・ | 直通 | | |

問7 傍線番号(9)「ヨーロッパ文学のそれとはまったく異なった、事物の認識の秩序」の説明として、最も適切なものを、次の

①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

35

- ① 自在な言語の結合によって見えない秩序を形成するヨーロッパ文学のリストの手法と異なり、清少納言は、その確かな審美眼によって見劣りのするものを排除し、中宮サロンの常識にかなうものを抜き出す手法を用いたこと
- ② 思うがままにことばを結びつけていくヨーロッパ文学の静観的な手法と異なり、清少納言は、中宮の小さなサロンを支配していた世界観によって、雑多なものの中から秩序ある事物を取り出す手法を用いたこと
- ③ 事物を列挙しそれを統合することによって、ある閉じられた宇宙へと統合されていくヨーロッパ文学の手法と異なり、清少納言は、審美的な眼と批評性にもとづいて、雑多なものを対等の立場で選び出す手法を用いたこと
- ④ ヨーロッパ文学では、その場の光景を賛美するさいに羅列という方法を用いたが、清少納言は、宮廷生活にある雑多な事物のなかから、映像的に美的なものだけを微妙な感受性によって受け止めていく手法を用いたこと
- ⑤ ヨーロッパ文学では、蒐集し羅列されたものを無秩序のままに置くことで批評性を獲得したが、清少納言は、蒐集した様々な事物に当時の常識や通念に基づく秩序を与えようとする手法を用いたこと

問8 傍線番号②「作者の周到な修辞」の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

36

- ① 自己の感性に忠実であろうとして、『義山雜纂』との間に編集方針の相違が生じたことへの行き届いた説明
- ② 常識への批判的な意味合いはもちろん、われわれに作者の目の存在までも意識させるといふ抜かりのない表現上の工夫
- ③ 社会通念に対して批判をすることによって、貴族社会に反逆することになってしまったことへの配慮を示す慎重な演出
- ④ 一般社会の常識的な考え方に対する批判的精神と、『枕草子』の事物の選択や羅列に見られる情緒的な表現の方法
- ⑤ 自らが属する中宮サロンにとどまらず、その周辺に存在する一般貴族や平民の通念にまでも配慮した懇切丁寧な叙述

問9 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

37

- ① 清少納言の『枕草子』の文学的価値は、唐代の『義山雜纂』を意識的かつ批判的に継承することによって、一般的価値観によらない独自のリストを作りあげたという点にある
- ② 清少納言が『枕草子』の執筆時に抱いていたウィットイイな感情は、『古今集』に代表される和歌の言語宇宙に通ずることによって、時代を超えて自然に再現することができる
- ③ 清少納言は『枕草子』において、「……は」の段では、当時の観念に沿った美的感覚を披露することを目的としているが、「……もの」の段では、独自の世界観を存分に発揮しようとしている
- ④ 『枕草子』第二段の文章では、清少納言が好みの目を常識的な感覚で選別したために、その内容が羅列的になってしまったことへの羞恥心しゆうぢしんが無意識に表現されている
- ⑤ 『枕草子』における蒐集と羅列が読む者に知的な喜びを与えるのは、雑多な事物が対等な資格で叙述され、秩序や統合を志向することなく並びあっているからである

第三問 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(20点)

東山のほとりなる住家を出でて、逢坂の関うち過ぐるほどに、駒引きわたる望月のころもやうやう近き空なれば、秋霧立ち渡りて、⁽²⁾深き夜の月影、風しづかなり。木綿付鳥かすかに⁽³⁾おとづれて、遊子なほ残月に行きけん函谷の有様、思ひ合はせらる。

むかし蟬丸といひける世捨て人、この関のほとりに藁屋の床を結びて、常は琵琶を弾きて心をすまし、やまと歌を詠じて思ひをのべけり。嵐の風はげしきを、しひつつぞ過ぐしける。ある人のいはく、「蟬丸は延喜第四の宮にてまします故に、この関のあたりを、四の宮と名づけたり」といへり。

いにしへの藁屋の床のあたりまで心をとむる逢坂の関

東三条院、石山に詣でて還御ありけるに、関の清水を過ぎさせ給ふとて、詠ませ給ひける御歌に、「あまたたび行きあふ坂の関水にけふをかぎりの影ぞかなしき」と聞こゆるこそ、⁽⁵⁾いかなりける御心のうちにかと、あはれに心細けれ。

関山を過ぎぬれば、打出の浜、粟津の原など聞けども、⁽⁶⁾いまだ夜のうちなれば、さだかにも見わかれず。昔天智天皇の御代、

大和国飛鳥の岡本の宮より、近江の志賀の郡にうつりありて、⁽⁷⁾大津の宮をつくられけりと聞くにも、このほどはふるき皇居の跡ぞかしと覚えて、あはれなり。

⁽⁸⁾さざ波や大津の宮のあれしより名のみ残れる志賀の故郷

あけぼのの空になりて、瀬田の長橋うち渡るほどに、湖はるかにあらはれて、かの満誓沙弥が比叡山にてこの海を望みつつ⁽⁹⁾めりけん歌、思ひ出でられて、「漕ぎゆく舟の跡の白波」、⁽¹⁰⁾まことにはかなくて心細し。

世の中を漕ぎゆく舟によそへつつ眺めしあとを又ぞながむる

(『東関紀行』による)

- (注1) 駒引きわたる望月——「駒引き」は、旧暦八月十五日に、諸国の牧場から献上される馬を、役人が逢坂の関で出迎える行事。「望月」は、牧場がある地の一つ、信濃の国の「望月」という地名と、行事がある十五夜の月の状態とを掛けている
- (注2) 木綿付鳥——鶏の異称
- (注3) 遊子なほ残月に行きけん函谷の有様——「遊子」は旅人。ここでは中国戦国時代の孟嘗君のこと。孟嘗君が夜中に函谷関で食客の一人に鶏の鳴き声をまねさせ、関所の門を開けさせて秦を脱出した故事を指す
- (注4) 延喜——醍醐天皇の治世
- (注5) 関山——関所のある山。逢坂山のこと
- (注6) 沙弥——出家して剃髪ていはつした男子
- (注7) 漕ぎゆく舟の跡の白波——「世の中を何に譬たとへむ朝ぼらけ漕ぎゆく舟の跡の白波」から引いている

問1 傍線番号(1)・(2)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

38

39

(1) やうやう近き

38

- ① 少しずつ親しみを覚える
- ② だんだん身近に思えてくる
- ③ ゆっくりと近づいている
- ④ 次第に近づいている
- ⑤ どんどん近くなる

(2) 深き夜の月影

39

- ① 深い霧で暗くなった月の光
- ② 霧が深いところにぼんやり映る月
- ③ 月に照らされて長く伸びた自分の影
- ④ 真夜中の月が作った影
- ⑤ まだ明けていない夜の月の光

問2 傍線番号(3)の「に」と文法的に同じものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

40

- ① 卯の時ばかりに船出だす
- ② その人の名、忘れにけり
- ③ 人の見るべきにもあらず
- ④ 涙のこぼるるに、目も見えず
- ⑤ よき人の、のどかに住みなしたる所は

問3 傍線番号(4)の敬語「給ふ」の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

41

- ① 丁寧の補助動詞で、読み手への敬意を表す
- ② 謙讓の補助動詞で、石山寺への敬意を表す
- ③ 尊敬の補助動詞で、東三条院への敬意を表す
- ④ 謙讓の本動詞で、石山寺への敬意を表す
- ⑤ 尊敬の本動詞で、東三条院への敬意を表す

問4 傍線番号(5)「いかなりける御心のうちにかと、あはれに心細けれ」の口語訳として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

42

- ① 東三条院がどんなご心境であったのかと、しみじみと痛ましく感じられる
- ② 東三条院がどんなご心境であったのかと、蟬丸はしみじみと悲しく感じられた
- ③ 蟬丸がどんな胸中であったのかと、東三条院はしみじみと趣深く思われる
- ④ 蟬丸がどんなふうに関東三条院のご決心を促したのだろうと、しみじみと痛ましく感じられた
- ⑤ 私ならどうしても気持ちを整理することができないと、しみじみと悲しく思われる

問5 傍線番号(6)「さだかにも見わかれず」の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

43

- ① 明るくなるまで、人の姿がはつきり見えないということ
- ② 関山から、打出の浜や粟津の原が見渡せないということ
- ③ 朝が来るまで、連れの人々と別れられないということ
- ④ 暗くて、どこなのかはつきり見分けられないということ
- ⑤ 暗い夜道で、すっかり道に迷ってしまったということ

問6 傍線番号(7)「このほどはふるき皇居の跡ぞかしと覚えて」の口語訳として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

44

- ① この程度は古い皇居の跡なら当然だろうと思って
- ② この辺りは昔の皇居の跡であるのだなと思われて
- ③ この近くに昔の皇居の跡があるのだなと覚えていて
- ④ この周辺が古い皇居の跡ではおかしいと思われる
- ⑤ このたびは昔の皇居の跡のようだなと思いがんで

問7 傍線番号(8)の修辞「さざ波や」の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

45

- ① 「さざ波や」は「大津」に掛かる枕詞まくらことばである
- ② 「さざ波や」は「宮」に掛かる枕詞である
- ③ 「さざ波や」は琵琶湖の波を表し、「志賀の故郷」を引き出す序詞である
- ④ 「さざ波や」は海の大波を表し、「大津の宮」を引き出す序詞である
- ⑤ 「さざ波や」は「あれ」や「名」の縁語である

問 8 傍線番号(9)「詠めりけん」の文法的説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

46

- ① ラ行上二段活用動詞の連用形＋過去の伝聞の助動詞の連体形
- ② ラ行上二段活用動詞の未然形＋過去の原因推量の助動詞の終止形
- ③ マ行下二段活用動詞の未然形＋尊敬の助動詞の連用形＋過去の原因推量の助動詞の連体形
- ④ マ行四段活用動詞の已然形＋完了の助動詞の連用形＋過去の伝聞の助動詞の連体形
- ⑤ マ行四段活用動詞の未然形＋可能の助動詞の連用形＋過去の伝聞の助動詞の終止形

問 9 傍線番号(10)「世の中を漕ぎゆく舟によそへつつ眺めしあとを又ぞながむる」の和歌は、誰が、どのようなことを詠んだ歌

47

か。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

- ① 筆者が、今から湖を渡る舟が頼りなくてどうしたらいいだろうという困惑を詠んだ歌
- ② 筆者が、満誓沙弥の歌に詠んだ景色を自分も今眺めているという感慨を詠んだ歌
- ③ 筆者が、世の中を渡ることは舟で湖を渡ると同じだという発見の感動を詠んだ歌
- ④ 満誓沙弥が、世の中は漕ぎ行く舟の跡に立つ白波と同じだという無常観を詠んだ歌
- ⑤ 満誓沙弥が、昔の人が眺めた景色はもう二度と見られないという哀惜の念を詠んだ歌

問10 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

48

① 筆者は、東山の近くにある家を出発して夜遅くに逢坂の関、打出の浜、粟津の原を通り過ぎて、夜明け方になって瀬田の長橋を渡った

② 蟬丸は、延喜の帝の第四皇子がいらつしやった逢坂の関の辺りを四の宮と名付け、草庵を作つて琵琶を弾いたり和歌を詠んだりしながら過ごした

③ 筆者は、家を出発してから逢坂の関を越えて、石山寺へ行き、瀬田の長橋を渡つてから比叡山に登り、そこで琵琶湖を眺めながら和歌を詠んだ

④ 筆者は、逢坂の関を越えたところで、通りがかりの人に、天智天皇の時代に大和国飛鳥の岡本の宮から近江国志賀の大津の宮へ遷都があつたと聞いた

⑤ 満誓沙弥は、夜明け方に比叡山から琵琶湖を眺めながら、昔の人が詠んだ「漕ぎゆく舟の跡の白波」の和歌を思い出しても悲しく感じた

問11 本文の出典である『東関紀行』は鎌倉時代に成立した紀行文である。同じ時代に成立した作品を次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

49

- ① 太平記 ② 十六夜日記 ③ 大鏡 ④ 更級日記 ⑤ 奥の細道